

はじめに

奥州藤原氏の拠点であった平泉の関山丘陵には、12世紀前半にはその拠点となる施設が成立していたことが知られる。それは政治的拠点としてはもちろんのこと、文化・情報・物流の拠点でもあった。世界文化遺産の登録においても注目されてきたその浄土の思想は、大陸から伝来した仏教の思想を基調として日本固有の様々な文化と溶け合って独自の世界観を形成している。

この平泉は、物質文化特に陶磁器の流通と消費という観点から見ても、当時日本有数の拠点であったといえる。中国をはじめとする遠方からの陶磁器が、平泉において多数出土していることが如実にこれを物語る。例えば国産陶器でいえば東海地方で生産された渥美・常滑産の壺類などが出土している。これらには大形の容器が多い。当初これらは産物を入れたコンテナとして平泉に持ち込まれ、その後容器として再利用されたのであろう。また国産陶器以外にも、中国・朝鮮半島産の陶磁器も見られる。12世紀は、平安京さらには大陸への交流の玄関口であった九州の博多遺跡群をはじめ、日本各地において中国産の陶磁器が流通・消費された時代であったが、平泉においては外国産陶磁器の出土量が非常に多い。この時代は「白磁の時代」(田中克子 2008「中国陶磁器」『中世都市 博多を掘る』海鳥社)とも称され、消費される貿易陶磁器としては白磁の流通が圧倒的であった。藤原摂関家を中心とする京都においても、中国南方地域の白磁の大量の消費が注目されているが、平泉では特に壺・水注類に対する需要の高さが特色となっている(八重樫忠郎 1997「輸入陶磁器からみた平泉」『貿易陶磁研究』No. 17。羽柴直人 2009「東北地方における12世紀の貿易陶磁—柳の御所遺跡堀内部地区の貿易陶磁器集計を基礎に—」『貿易陶磁研究』No. 29。三浦謙一 2015「平泉遺跡群発掘調査の記録—発掘調査報告書から—」『岩手大学平泉文化研究センター年報』第3号。三浦謙一本書所収論文)。

中世平泉について、その東アジアにおける貿易陶磁器の流通と消費についての特徴を明らかにするためには、1)平泉と東アジア各地域の中世都市(生産地、

はじめに

消費地、集積地)との共通性及びその独自性を抽出すること、2)貿易陶磁器が東アジアのどのようなルートで流通していたかを明らかにすること、について検討することが重要である。

岩手大学平泉文化研究センター(以下「当センター」という)では、如上の問題意識のもとさらに東アジアにおける貿易陶磁器の流通についての平泉の位置づけを明らかにするために、貿易陶磁器の生産地である中国における生産と流通の状況を把握した上で、日本におけるそれらの流通や消費のあり方についても再検討することとした。これまで平泉における貿易陶磁研究は、その流通・受容・消費のあり方を明らかにすることが中心であり生産地の状況を踏まえた上で従来の説を再検討することは重要な意義をもつものとする。

この研究目的を達成するために、当センターでは国際的な共同研究を実施するとともに、岩手大学内の文系・理系の枠組みを越えた学際的研究手法を導入しつつ、国内外の研究者にも参画いただき研究を推進した。まず中国側に関しては平泉に流通する中国陶磁器の産地の可能性が高い福建省・浙江省の研究者と協力しつつ、平泉で出土する陶磁器の産地と推定される窯址の調査や消費地の調査を行うため、中国の福建博物院考古研究所及び浙江省文物考古研究所の両機関と協定を締結し3カ年にわたる共同研究を行った。具体的には中国研究機関の研究者による平泉出土中国産陶磁器の実見、及び当センターの研究者による中国現地の窯址の実地調査と窯址出土陶片の実見調査を行った。福建省・浙江省の研究者による最新の調査に基づく新知見については、本書の中国側の研究者の論考(沈岳明論文、羊澤林論文)の中で取り上げている。これらの共同研究を踏まえ平泉に流通する中国産陶磁器の様相について中国側と日本側の両者が共通認識をもった上で、理化学的分析を導入した産地推定に関する研究を行うことにした。その際には中国に当センターが所持するポータブル型蛍光X線分析装置を持ち込み、平泉で出土する中国産陶磁器に類似する(産地と推定される窯址の)陶磁器片を計測しその成分組成を明らかにした上で、岩手県教育委員会および平泉町教育委員会が所蔵する平泉遺跡群出土の中国産陶磁器も同様に計測を行い、それらの比較・検討を行った(會澤等の論文)。また博多遺跡群で出土した平泉遺跡群出土と同じタイプの陶磁器片についても検討を行い、今後の比較研究の基礎的研究を行った(田上論文)。この産地推定に関する研究は今後

も引き続き継続する必要があるが、本報告においてかなり大きな成果を上げることができた。特に、平泉で出土する中国南方産の白磁と青磁の産地に関して、我々の研究によりかなり具体的な地域・窯址に言及することができた。これにより先学による考古学的研究から導き出された仮説を、理化学的視点という別の研究方法から検証することができたと自負するものである。まさに科学的な研究サイクルの中で本研究が進めることが出来た意義は大きい。

また東アジアにおける中国南方産製品の中国国内における流通のあり方に関して、中国の生産地に近い地域の様相(鄭建明論文, 栗建安論文)及び生産地周辺の海外交易に関わる拠点の様相(王建文論文), 生産地から離れた中国国内の諸地域における流通消費のあり方(徐波・徳留論文)についても議論を行った。さらに日本国内の様相に関しては、平泉遺跡群の状況(三浦論文, 劉海宇論文)を明らかにするとともに博多における動向(田中論文)を検討し、博多・平泉の流通の様相の比較を行った。その上で、大陸から日本へいかなる理由によりどのようなルートを経由して中国南方産製品が流通したのかと言う点についても大いに議論(森論文)を深めることができた。その詳細に関しては各論考をぜひご一読いただきたいし、これらの成果をもとにさらに平泉学やアジアにおける陶磁史の比較研究が深化されることを期待したい。

最後に本共同研究に多大なるご尽力をいただいた中国福建博物院考古研究所, 浙江省文物考古研究所および岩手県教育委員会, 平泉町教育委員会ならびに本研究活動に参画いただいた国内外の各研究者に感謝の意を表します。

2018年10月16日

藪 敏裕

目 次

はじめに

第 1 部 12 世紀～14 世紀の貿易陶磁器の生産

- 南宋時期の浙江窯業について……………沈岳明 9
- 12 世紀における白瓷の生産と海外交易……………栗建安 21
——中国福建南部地区を中心に——

第 2 部 12 世紀～14 世紀の 日本国内貿易陶磁器の流通とルート

- 平泉出土の中国産陶磁器の様相……………三浦謙一 37
- 「博多」にもたらされた中国陶磁器……………田中克子 51
——国内消費地との比較材料として——
- 大陸と列島をつなぐ
陶磁器流通ルートの様相……………森達也 79
——11～12 世紀を中心に——

第 3 部 中国国内における南方産陶磁器の流通

- 生産区域の広がりから見る
龍泉窯の対外輸出……………鄭建明 113
- 宋・元期 閩清義窯の生産と対外貿易……………羊澤林 131

山東地域中国南方産陶磁器の
流通に関する研究(その2) ……徐 波・徳留大輔 147
——11世紀～13世紀を中心に——

唐・宋期の貿易港 上海青龍鎮 ……王建文 161

第4部 産地推定に関する研究

柳之御所跡出土の
中国産白磁「吉」字耳破片の産地推定研究 ……劉海宇 181

博多出土貿易陶磁の胎土分析 ……田上勇一郎 189
——11・12世紀の中国産白磁碗について——

浙江産陶磁器の産地推定に関する研究
——平泉出土の青磁に関する考察——
……徳留大輔・會澤純雄・桑静・平原英俊・三浦謙一・沈岳明・徐軍 207

福建産陶磁器の産地推定に関する研究
——平泉出土の白磁と所謂同安窯系青磁を踏まえて——
…徳留大輔・會澤純雄・桑静・平原英俊・三浦謙一・羊澤林・栗建安 219

執筆者紹介 230

おわりに 233